Osaka University Knowledge Archive

Title	プルースト最後の評論『ボードレールについて』
Author(s)	和田, 章男
Citation	Gallia. 1996, 35, p. 59-67
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12677
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

プルースト最後の評論『ボードレールについて』

和 田 章 男

プルーストは1908年末から1922年11月に没するまでのおよそ14年間にわたって畢生の大作『失われた時を求めて』の執筆を続けた。『ソドムとゴモラⅢ』以降の巻は死後出版であり、彼は自分の作品の出版を最後まで見届けることができないままこの世を去ったのである。死の不安は執筆開始当初から彼につきまとい、作品の完成に向けてまさしく時間との競争であった。しかしながらプルーストはその間小説の創作だけに没頭していたであろうか。確かに小説の執筆を開始してから第一次世界大戦が終結した1918年までは小説の抜粋以外はほとんど何も発表していない。ところが大戦後、数は決して多くないが、にわかに評論を発表し始めた。二つの文芸評論、二つの序文[1]、その他書評、アンケートの回答などを公にしている。晩年のこれらの批評活動を総合的に扱うことは別の機会に譲り、本稿では文芸評論の一つ『ボードレールについて』[2]に焦点を絞って考察する。この論考は1921年6月に「新フランス評論」誌に掲載されたもので、作家の死の一年あまり前のことである。これ以後アンケートへの回答を別にすると、ドストエフスキーについての短い断片が残っているが[3]、未発表のままであり、やはりこのボードレール論が発表された最後の評論であると言える。

1921年、プルーストは『ゲルマントの方Ⅱ、ソドムとゴモラⅠ』[4]および『ソド

1）『フローベールの文体について』(1920)、『ボードレールについて』(1921) を「新フランス評論」誌に発表。またジャック=エミール・ブランシュの « Propos de peintre » (1919)、およびポール・モランの « Tendres Stocks » (1921) に序文を寄せている。なお後者は1920年11月に『ある友に（文体についての覚え書)』というタイトルで「パリ評論」誌に掲載されたものである。

2）*Contre Sainte-Beuve*, précédé de *Pastiches et mélanges* et suivi de *Essais et articles* (以下 *CSB* と略す), « Bibliothèque de la Pléiade », 1971, pp.618-639.

3）カイエ LIX に « Pour le dernier cahier. Capitalissime » という覚え書を付された断片。1922年前半に書かれたものと推定されている (*CSB*, p.963, 注1)。ドストエフスキーの生誕百年祭の年に当たる1921年の9月にジャック・リヴィエールがプルーストに同作家についての論考を依頼している〔*Correspondance de Marcel Proust* (以下 *Cor.* と略す), Plon, XX, p.476〕。しかしプルーストは知識が不十分であることと小説の校正に忙しいことを理由に断った。翌年この断片を書いたのは小説の中に組み入れるためだったかも知れない。

4）『ソドムとゴモラ』の第一部のみが『ゲルマントの方Ⅱ』との組み合わせで NRF より出版された。

ムとゴモラⅡ』の刊行を急いでいた。また気管支炎を患ったり、リューマチ性の熱に冒されたりして、健康状態は最悪のもので、手紙を自分で書くことも困難なことが多かったほどである[5]。それにもかかわらず何故この時期にボードレール論を書いたのであろうか。この評論の執筆の理由ないしは目的を問うことが本稿の課題の一つである。さらに興味を引かれるのは、プルーストがこれ以前に別のボードレール論を執筆しているということである。それは『失われた時を求めて』の初期形態である『サント=ブーヴに反論する』の枠組み内で書かれたものであり、生前は発表されずに草稿の状態で残された[6]。プルーストがこの草稿を書いたのは1909年のことで、二つのボードレール論の間には12年もの歳月が経過していることになる。しかも片や小説執筆開始期、もう一方は執筆終了期に当たる。大作を書き始めようとしていた時と、書き終えようとしていた時とで、プルーストのボードレール観や文学観に変化あるいは発展があるのか否かという問いかけが必要であろう。

1．論考執筆の経緯

まずボードレール論執筆の経緯を書簡を通して整理してみよう。年代はすべて1921年である。

4月1日　プルースト、ガリマールにボードレール論執筆の可能性をほのめかす[7]。また『悪の華』の « édition savante » を探している（*Cor.*, XX, p.162）。

4月11日[8]　ガリマール、リヴィエールにプルーストの論考執筆意志を伝える。

4月13日　リヴィエール、プルーストに論考歓迎の挨拶を述べ、『悪の華』の学問的な校訂版を送る約束をする（*Cor.*, XX, p.181）。

4月14日　プルースト、リヴィエールに論考執筆は不確かである旨伝える。『悪の華』のクレペ版を購入するよう秘書（？）に指図する（*Cor.*,

---

5）秘書のアンリ・ロシャおよび家政婦のセレスト・アルバレが代筆している。

6）*CSB*, pp.243-262.

7）この手紙の末尾は切り取られているが、その直前の文は次の通りである —— « [...] ce serait peut-être une occasion pour article pour chez »。ボードレールの校訂版をプルーストが探していること、リヴィエールの13日付書簡に、ガリマールからプルーストのボードレール論執筆の意志を聞いた旨が書かれていることから、手紙の切り取られた部分に論考の執筆計画が記されていたと考えられる。ガリマールが問題の末尾部分をリヴィエールに送付したのであろうと推論されている（*Cor.*, XX, p.162, 注7）。

8）リヴィエールの13日付書簡の中で「一昨日」と記されていることから、この日付を類推できる。

XX, p.182)。

4月19日または20日　プルースト、ガリマールに論考の4分の3を執筆したことを伝える。「とても長くて、とても出来の悪い」論考で、リヴィエール宛の書簡の形式をとっていることを述べている（*Cor.*, XX, p.196)。

4月22日　リヴィエール、プルーストに論考を受け取ったことを知らせる（*Cor.*, XX, p.202)。

プルーストは書簡に日付を書くことはないが、4月1日付のガリマール宛の手紙は健康上の理由から秘書のアンリ・ロシャに口述したものであり、彼は日付を記しているのでこの年代設定は確かである。それ以降の日付はフィリップ・コルブの推定に従ったが、その論拠に反論の余地はなく、ほぼ正確な日付であると考えてよい。4月14日の段階ではプルーストはボードレール論を書くかどうかまだ迷っているので、執筆の開始はおそらく14日以降であろう。19日か20日頃には4分の3が仕上がり、22日の夕方に完成して、リヴィエールのもとに届けられている。つまり執筆期間は長く見積もって、4月15日から22日にかけての一週間ほどということになる。実際にはもっと短期間で書き上げた可能性もある。というのもプルーストは論考執筆のためにわざわざ『悪の華』の学問的な校訂版（おそらくクレペ版）を購入したにもかかわらず、大量の引用をすべて記憶によって行なっていることから[9]、原典で確認する暇も惜しむほど相当な速度で執筆したように思われるからである。その上、かつて『サント=ブーヴに反論する』の中でボードレール論を書いており、部分的には重なっていることもその理由として考えられる。

ところで『失われた時を求めて』のこの時期における進行状態はどうであったろうか。

3月6日　プルースト、『ゲルマントの方Ⅱ、ソドムとゴモラⅠ』の校正刷りを返送。この巻は5月2日に出版される（*Cor.*, XX, pp.119-120)。

4月8日　プルースト、ガリマールに『ソドムとゴモラⅡ』のタイプ原稿を送付（*Cor.*, XX, pp.164-165)。

4月21日　プルースト、『ソドムとゴモラⅡ』の校正刷りの遅れに苛立ちを示す（*Cor.*, XX, p.200)。

9）このことは論考および書簡においてプルースト自ら言明しており（*CSB*, p.638；*Cor.*, XX, p.197, p.200)、実際引用には誤りが散見される。

4月8日、プルーストは『ソドムとゴモラⅡ』のタイプ原稿を、手直しを加えないままガリマールに送っている。しかしながらこの巻についてはかなり大幅な書き直しの必要を感じており、その作業は校正刷りにおいて行なう旨ガリマールに知らせている。ところが21日段階でもまだ校正刷は仕上がっていない[10]。つまり4月8日から23日頃までプルーストの手元にはタイプ稿も校正刷りもなかったということであり、校正の仕事を進めることができない状態であったと考えられる。それではカイエにおいて小説の他の部分の執筆ないしは書き直しの作業を行なっていたであろうか。プルーストの書簡における次の文はこの点に関して注目に値する――「『ソドムⅡ』が私の側から真に手直しを加えなければならない唯一の巻です。後の巻はすべて、私が死んでもほぼそのまま出版できる状態です。」(*Cor.*, XX, p.147) つまりプルーストは『ソドムⅡ』以外はほぼ完成していると少なくともこの段階では考えていたのである。したがってこの時期にカイエにおいて作品の他の部分の執筆をしていたとは考えにくい。以上のことからボードレール論を書いた4月14日頃から22日までは校正を中断していた時期と重なっていることがわかる。ガリマールに『ソドムⅡ』の校正刷りを催促した21日は論考をほぼ終えようとしていた時であり、プルーストは『失われた時を求めて』に関する仕事の休止期間をうまく利用して『ボードレールについて』を執筆したのである。

ところでこのボードレール論は「新フランス評論」6月号（6月1日刊）に発表された。これは『ゲルマントの方Ⅱ、ソドムとゴモラⅠ』の出版（5月2日刊）のちょうど一カ月後であり、プルーストは両者のこの発刊時期に強いこだわりを持っていた。後に見るように、ソドムとゴモラのテーマとボードレール論とは深く関連している。

2．論考執筆の理由あるいは目的

＜外的要因＞

i）ボードレール生誕百周年

1921年はボードレール生誕百周年に当たり、当然のごとく様々な文芸誌においてボードレールについての論考が掲載された[11]。ところが「新フランス評論」誌

---

10) 同年の6月になっても、プルーストはまだ『ソドムⅡ』の校正刷りを受け取っていない(*Cor.*, XX, p.300)。

11) プルーストが書簡および論考の中で言及しているボードレール論は以下の通りである――Fernand Vandérem, *Baudelaire et Sainte-Beuve*, Librairie Henri Leclerc, 1917 ; André Gide, « Théophile Gautier et Charles Baudelaire », *Les Ecrits nouveaux*, 1917（プルーストはこの評論を読んでいない）, Léon Daudet, « A propos de Baudelaire », *L'Action française*, 3 avril 1921; Id., « Encore le centenaire de Baudelaire. A propos des paradis artificieles », *L'Action française*,

ではまだ何も発表されておらず、このことが執筆理由の一つであったことは確かである（*Cor.*, XX, p.198, p.206, p.271）。

ii）二つの反論

ジャック・ブーランジェに対する反論　プルーストが評論を書く際、誰かに対する反論が動機となることがしばしばある。『失われた時を求めて』の初期形態は文字通り『サント=ブーヴに反論する』であった。また1920年に発表された『フローベールの文体について』はチボーデに対する反論から出発したものである。さて、1921年４月９日に「オピニオン」誌に掲載されたジャック・ブーランジェの『ボードレールのダンディスム』を読んで、プルーストは反応を示し、ブーランジェ宛の書簡の中で同論考について言いたいことが多くあると述べている（*Cor.*, XX, p.179, p.191, p.271）。それではこの反論が彼のボードレール論執筆の動機であろうか。日付に注意する必要がある。ブーランジェの評論が発表されたのは４月９日であるが、プルーストがガリマールに論考執筆の可能性を示唆したのはそれより一週間ほど先立つ４月１日のことである。それ故にブーランジェへの反論が直接のきっかけになったとは言えない。しかしながら刺激になったことはまちがいなく、プルーストの論考の中に、「ボードレールの詩には思想が欠けている」という同批評家の考えに対する驚きを表す数行が含まれている[12]。もっともこの数行も括弧付きで遠慮がちに挿入されたものであり、ブーランジェに対して常に敬意を表していたプルーストは、その書簡の中でも繰り返し述べているように、論考には彼に対する反論は直接的には表されていない。

ポール・ヴァレリーに対する反論　プルーストのボードレール論にはもう一つの反論が含まれている。ヴァレリーが « Eupalinos ou l'architecte » [13] の中で表明している知性的、意識的な芸術創造に価値を置く考え方に対する反論である。プルーストが同時代の詩人に異論を唱えたいとの意志を表したのは、1921年３月22日あるいは23日と推定されているガリマール宛の手紙においてである（*Cor.*, XX, p.148, p.151）。これはボードレール論執筆の希望をほのめかした時より一週間前のことであり、執筆の理由の一つと言えるかも知れない。ただしこの反論も10数行のものであって、ボードレールに関連させて挿入した感がある。

＜内的要因（個人的理由）＞

i）1920年５月にプルーストはリヴィエールからサント=ブーヴ論を書くよう依頼

---

14 avril 1921; Jacques Boulanger, « Le dandysme de Baudelaire », *L'Opinion*, 9 avril 1921; Edmond Jaloux, « Le Centenaire de Baudelaire », *Revue hebdomadaire*, 2 juillet 1921. これらの評論の中で1921年に発表されたものは、プルーストがボードレール論執筆の可能性を伝えた４月１日より後に公にされている。

12) *CSB*, p.624.

13) 1921年３月１日発刊の「新フランス評論」に掲載。

されるが、これに関しては断り、ボードレールかバルザックについての注釈なら喜んで書くと答えている（*Cor.*, XIX, p.278）。おそらく『サント=ブーヴに反論する』の中で執筆済みのこれらの作家に関するエセーのことが頭にあったと思われる。彼は一度書いたものを完全に捨て去ることを好まない性格であり、それらのエセーが『失われた時を求めて』の枠組みの中に入らないために、10年も以前のテクストではあるが、何らかの形で公にしたいと思ったのであろう。もう一つ興味を引かれるのは、サント=ブーヴについての論争[14]に加わらない理由を« Mon cher Rivière »で始まるリヴィエール宛の書簡形式で発表することなら可能であることを、プルーストが同書簡中で述べていることである。この形式は後の『ボードレールについて』において使われることになる。以上のことからボードレール論執筆の意志の表明は実のところ1920年の5月にまで遡るのである。

ii）さらに注目すべきことは1920年10月頃にプルーストがボードレールの『漂流物』（*Les Epaves*）[15]を再読していることである――「次に『ソドムとゴモラ』を出版することによって、私は未来のあらゆる名誉を――喜んで――諦めます。[中略] さて私はボードレールのあの見事な『漂流物』を読み直したところです。これは実際には『悪の華』の一部なのですが、それは比類ないほどに大胆なものです。」（ナタリー=クリフォード・バーニー宛の書簡、*Cor.*, XIX, p.543）プルーストがその大胆さに感銘を受けているのは『漂流物』の中に含まれているいわゆる禁断詩篇[16]のことで、そこではとりわけ女性の同性愛がテーマとなっている。20世紀初頭においても同性愛に対して世間の目は冷たく、同テーマが大きく展開される『ソドムとゴモラ』の出版を直前にして、プルーストは先達の大詩人の禁断詩篇を再読することによって勇気づけられたことであろう。1920年11月15日発刊の「パリ評論」誌に掲載された『ある友に（文体についての覚え書）』〔これは後にポール・モランの『タンドル・ストック』（1921）の序文になる〕の中でも確かにボードレールの禁断詩篇について触れられているが、大きく扱われるのは後の『ボードレールについて』においてである。しかも上で述べたように、この評論の発表時期を『ソドムとゴモラ』の出版と合わせていることからも、不道徳とみなされていた同性愛のテーマも既に高い文学的価値を有しうることを19世紀の大詩人を引き合いに出して証拠としようとしたと考えられる[17]。

14）前年の1919年はサント=ブーヴの没後50周年に当たり、多くの評論が発表された。

15）1866年ベルギーで出版されたボードレールの詩集のことで、禁断詩篇6篇を含む23篇が収録されている。

16）風俗を乱すとして『悪の華』の初版（1857）から削られた6篇の詩のこと。

17）実際プルーストは同論考の中で『ソドムとゴモラII』に登場するモレルという人物を紹介し、ソドムとゴモラを結び付ける役割を与えていることをボードレールの場合と比較している。

3．『ボードレールについて』の特徴 ――『サント=ブーヴに反論する』と比較して

1909年に『サント=ブーヴに反論する』の枠組みの中で書かれたボードレールに関する二つの断片（以下「論考Ａ」と呼ぶ）と、『失われた時を求めて』をほぼ書き上げた1921年のボードレール論（「論考Ｂ」）との間にはどのような相違があるだろうか。

まず両論にはともにおびただしい数の『悪の華』からの引用が見られることに注意を向けてみよう。論考Ａはプレイアッド版で20ページだが、その中で引用された詩は合計29篇で行数にして129行に及ぶ。他方論考Ｂは22ページで、詩篇の数は23篇、行数は76行である。ともに相当数の引用がなされているわけだが、これをすべて記憶に基づいて引用しているのは驚嘆に値する。さらに興味深いことは二つの論考で共通している詩はわずか12篇で約半数にしか過ぎないということである。引用の相違を詳細に検討することはできないが、最も特徴的な違いのみを取り上げよう。論考Ａでは確かに29篇129行の引用があるのだが、最も多く引用されているのは、「小さい老婆たち」« Les Petites Vieilles »（５回計33行）、「反逆者」« Le Rebelle »（２回計10行）、「祝禱」« Bénédiction »（７回計20行）の３篇で、これらを合計すると63行となり、全体の半分にまで及んでいるのである。プルーストはこれらの詩篇を中心にして、ボードレールにおける冷酷な感情描写、カトリシズムとも通じる堂々たる形式美、具体的で力強いイマージュなどについて論じている。ところが論考Ｂでは「反逆者」と「祝禱」の引用は皆無となり、「小さい老婆たち」も33行から10行にまで減らされている。それに対して論考Ａではほとんど引用されていなかったのに[18]、論考Ｂに見られるのが、「地獄に堕ちた女たち」« Femmes damnées »（３回計５行）、「レスボスの島」« Lesbos »（４回計６行）、「宝石」« Les Bijoux »（１回４行）の３篇で、いずれも禁断詩篇に属している。特に前の２篇は女性の同性愛を論じるくだりで引用され、ボードレールが詩集の総題を「レスビエンヌたち」« Les Lesbiennes » にしようと考えていたことに触れられるとともに、『ソドムとゴモラ』のエピグラフともなるヴィニーの有名な詩句 ――「女はゴモラを持ち、男はソドムを持つだろう」―― も同時に引用されている。このことは上でも繰り返し述べたように、プルーストの作品の自己弁明となっていると言えよう[19]。

論考Ａではボードレールの詩の表現力、形式の見事さ、イマージュの喚起力な

---

18) 「レスボスの島」がわずかに２行引用されているが、ゴモラのテーマとは無関係の文脈においてである。

19) cf. Juliette Hassine, *Essai sur Proust et Baudelaire*, Nizet, 1979, pp.92-93. アシーヌは二つの論考の間で、ボードレール観は変わっていないが、禁断詩篇の導入が新しさであると指摘している。

どについて主に論じられていたが、論考Bにおいてはテーマ別に考察がなされているのが特徴である。しかもその際必ず他の詩人や作家が引き合いに出されていることも見逃すことができない。実のところ論考Aの後半でも様々な詩人との比較が簡単ながら行なわれている。しかしながらそれらは単に似ているということが指摘されるに留まっている。しかも各詩人は一人の偉大なる「詩人」の様々な現れであるとの思想が見られるのである。それに対して論考Bでは類似より相違の方に力点が置かれている。単純な対比としては、「愛」や「死」の表現についてユゴーとボードレールが、「熱帯風景」についてはルコント・ド・リールとボードレールが比べられているが、より興味深いのは、二人の作家を対立的に比較した上で、その一方にボードレールを近づけて論じるという論法である。たとえば「神秘性」に関してはユゴーとヴィニー（＝ボードレール）、作家の健康あるいは病気についてはヴォルテールとドストエフスキー（＝ボードレール）、古典性はコルネイユとラシーヌ（＝ボードレール）というように、いずれの場合も後者の作家の系列にボードレールが入れられている。ところが同性愛に関しては、ヴィニーとボードレールが比較され、プルースト自らが後者と関係づけられているのだ。論の中心あるいは目的は当然のことながらボードレールにあるのだが、最後の同性愛のテーマについてはプルースト自身が詩人とすり変わって、主役の位置に立っているのである。これは一種の文学的ストラテジーと言えるかも知れない。つまり他人を語りながら暗に自らを語っているのである。

最後に、作者と作品との関係についてのプルーストの見方に注目したい。よく知られているように、サント=ブーヴ反論においてプルーストは作家の自我を社会的自我と創造的自我に分け、書簡や証言などを通して、前者のみを見て作品を判断したサント=ブーヴの方法を批判した。論考Aでボードレールを扱った際も、前半は伝記上の事実を取り上げつつ、批評家の詩人に対する無理解ぶりを示し、後半は主に作品のみを対象にし、詩人の天才を証明しようとしている。後のヌーヴェル・クリティックにも通ずる、作者と作品の弁別がここに見られるのだ。ところが論考Bにおいては作者の問題が随所に現れている。たとえばユゴーの詩「眠るボアズ」（『諸世紀伝説』に収録）では作者と主人公のボアズが、また「サムソンの怒り」（『運命 — 哲学詩集』に収録）ではヴィニーとサムソンが同一視されている[20]。ヴィニーに関しては、彼のドルヴァル夫人に対する嫉妬が詩作のもとにあるとまで指摘されている。またボードレールの失語症やドストエフスキーの癲癇などの病気を問題にし、さらにワグナー音楽への熱狂が詩の創作に影響して

20) *CSB*, p.619 : « Ce grand poème biblique [...] est perpétuellement vivifié par la personnalité de Victor Hugo qui s'objective en Booz » ; *Ibid.*, p.620 : « c'est lui-même Vigny qu'il a objectivé en Samson [...] ».

いるという考察も見られる。論考の中に書かれていることではないが、ジッドの証言によると、同性愛のテーマを扱ったボードレールは彼自身同性愛者であったに違いないと、プルーストはジッドとの会話において言明したという[21]。これらはサント=ブーヴ反論のテーゼと矛盾してはいないだろうか。しかし、よく考えてみると、プルーストは作品と作者を切り離したわけではなく、作家の自我を二つに分割したのである。芸術創造に関わる深い自我とはどのようなものか再検討する必要があるのではないか。サント=ブーヴ反論の中では主に記憶が、とりわけ無意識的記憶が問題であった。『失われた時を求めて』もこの記憶の現象を基礎に構築されている。確かにプルーストは、第一次世界大戦に至るまで、過去を題材にしながら、少年時代、青年時代を描いているが、戦争の勃発、そして特にアルフレッド・アゴスティネリにまつわる事件以降、小説の題材はもはや遠い過去ではなくなる。アルベルチーヌの物語がアゴスティネリとのドラマをもとにほとんど生と物語が平行するかのように書かれていったことはよく知られている。過去の記憶が問題ではなく、現在の愛と嫉妬、病気、同性愛などが、芸術体験も含めて、作品創造に関わる深い自我に属するものと、プルーストは考えるようになったのではないだろうか。

生前に発表された最後の評論『ボードレールについて』は書簡形式でかなり自由に書かれたものであり、系統的にプルーストの文学観を表したものではない。自らの作品に対する弁明の書という性格を持ちつつ、作者と作品の関係という文学、芸術における永遠の問題について、大作をほぼ書き終えた段階でのプルーストの最終的な見解が不完全ながらも垣間見えるのである。

（大阪大学助教授）

21) Gide, *Journal 1889-1939*, « Bibliothèque de la Pléiade », pp.691-692.